The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第一回豊公遺跡見學記
Author(s)	仲田, 應弘; 桑原, 直子
Citation	懐徳. 1932, 10, p. 70-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ひ、龜甲に四字宛銘文を畫き、その製作の動機を告げてゐる。

（五）

恩師佐々木先生の熱心にして雄辯なる御説明によつて、斑鳩巡りも愉快に感激のうちに終ることを得たので、中宮寺の門前で一同解散した。

余等數人は所用あつて奈良へ立寄る旁々先生を見送つて乘合自動車に同乘し、法隆寺より大和平野を東北に進んだ。秋の夕暮れ物の哀れを催すせいか、將又佐々木先生とこれが一生の御別れであつた爲めか、車中默々として相語らず、靜かに暮れゆく八田の連山を眺めつゝ、奈良大軌驛前に着いて恩師と御別れした。

◎秋の暮れ藥師の森に鳩の鳴く

第一回豐公遺跡見學記

仲田應弘

京阪電車で大阪の町を出端れると、工場の煙筒の黑い煙が天へ屆きさうだ。

中書島で字治電に乘替へ、六地藏で下車したのは九時半だ。どんより曇つた空は、銀糸の樣な雨を零して來た、堂友會が出ると何時も雨や、と誰やらが云ふ。トンビを著て來ればよかつたとの車中からの薄寒さが襟を搔き寄せしめる。バスの來るのが遲い。

醍醐でバスを降りて寺門を入ると、此の邊櫻が林立してゐる。

「こらあいかん、櫻時でないと駄目だ、櫻の花見はいゝだらう」と吉田先生は惜しさうに歩かれる。三寶院の境内に枝垂櫻が四本、繞りに長々と枝を垂らして、或物は地に屆きさうだ。二旬ばかりの間に、美しい花を匂はせようと、咲き出でむ力が其の芽毎に張切つてゐる。右側の大樅も特筆すべき古木だ。

院の玄關に、檜の面が四寸もあらうと思ふ鸞鳳と大書した古風な衝立が、吾々の度膽を抜いて了ふ。筆者は詳ではないが、以前此の寺にゐた山伏が帚の様な物で書いたとか云ふ。

中村先生が來られ、直ぐ玄關から廣間へ案内される。兩側に毛氈が敷かれて吾々を待つて下さつた様な親しさに坐る。襖繪なり壁畫は、狩野山樂の筆らしく、庭の枝垂櫻の古木なり、庭を隔てゝ勅使門の菊桐の紋が見通せる窓は肱突窓といつて、桃山時代風であり當時より現存した物だと、井上正美氏は話して下さつた。襖繪壁畫の繪具は、後世の爪の長い畫家が掻き取つたものやさうだ。

中村先生は豊太閤がなぜ三寶院と關係を附けたか、桃山に居を占めたか、豊太閤の人物評から戰國時代の武士の節操に及んで、約一時間ばかり、御講話の終つたのは十時十三分だつた。小憩後、建築、庭園の御説明に移る。

此の寺は平安朝の中頃に出來たもので、座敷の方は神殿造りと云つて其の時代特有の建築により、簾の子、廂の間などがある。此の寺の庭

は、平安朝の庭と、南北朝から作風の出來た石庭と綜合した缺點を持つてゐる。平安朝の庭は石を使はず、灌木をも用ゐず、大木ばかりで造つた。室町時代からは水を使はずに小石を敷き並べて水を現はしたものだ、此の庭も水流を現はした石を繞つて、小石が緣の下迄も流れ入つてゐる。卽ち水を表はしたのである。庭の奧、椎の根本に、豊の祠と云ふさゝやかな社が木葉隱れに見ゐる。此れは豊公を祠つたものだが、德川時代秀吉を祭つてゐては、瞰まれるから、豊公を慕ふの餘り、稻荷としてお祠りしたさうだ。

平安朝時代は、室に、疊を敷かなかつた。必要な時には、上敷用の莫蓙を敷いた。戸は蔀になつてゐる。

柳の間は、やはり狩野山樂の筆だ。柳に四季を表はしてゐ、其れぞれに物悲しい感を持つて居ると御說明下さつたが、暗い上に離れて見たのでは解らない。其の室の外に、柱越しの梅が戸から戸に畫かれてある。柱を越して畫かれた故其の名が有るのだが、當時としては大膽な手法の由だ。柱に古く埋木が有る。是は、うめ(梅)木だと中村先生は說明と同じ口調で洒落られる平安朝以後の趣味的洒落が一つ一つ先生に近しめられるので愉快だ。大きな石の邊に竹が七八本植ゑられた庭がある。これは室町時代の物やさうだ。

庭の生命は二百年で、木が大きく成長し過ぎると作者の意圖も變つて了ふ。竹は何百年しても變らぬから茶室などには好ましいさうだ。庭を鑑賞する場合、年限をマイナスして見るべき

もんだとは先生の教へである。

三寶院には佛畫を澤山藏してゐる。此れは二十年程前に探出した物で粉本類が大方で繪畫史を研究するには必要缺く可からざるものである

信實の不動、秀賴八才の書、豊公大明神の幅などが、蟲ばまれた儘に座敷に掛けられてあつた。

筆者は解らぬが閻魔像と教へられた幅に、或人が、舌を拔くんですね、と寺僧に笑ひかけると、密教の閻魔は舌を拔きませんと力强く云つてゐた。當時の住職だつた義演の日記が、中村先生によつて展げられた。昔は紙は貴重だつたので、諸方からの手紙を裏返して綴ぢたもので、慶長十七年大阪陣の前の物である。日記の裏には片桐且元の手紙、二葉院（秀吉の北の方で家康の妹）のもあつた。日記の裏を探しても吾々の飯の種が有るのだと、人々に覗かせ乍、說明して下さる。違ひ棚の金具は室町時代から打たれたもので、三寶院のは德川時代のやさうだ。桃山時代の作には特に豊公桐が用ゐられてゐる。

中食後、暖く日の照つてゐる敷砂を踏みしめて三寶院を發つ。

大門を入ると椎、杉、檜の樹林だ、道端の清らかな小流れの音が、心を引締める。五重塔の前に至る。此の塔は、天歷五年村上天皇の勅願に依つて建立された、高さは百十九尺四寸、方二十一尺七寸、京都府内第一の古塔である。此の塔の特長は、九輪が長く、全體の三分の二に及んでゐる。慶長三年　醍醐の花見の時に修繕されたものである。屋根と屋根との間の欄干の

先が、上へ反れてゐる。此れが慶長式の特長で取替へられた事が知れるので有る。天歴の物だと端は切つた儘で反れては居ないさうだ。室生寺の光仁時代の物と考へ合せるといゝさうだ。内部の構造の進化は、宇治の平等院邊りへ延びて、入口の上には黒地に日の丸を點々と續けて置いてあるのも注意させられた。

大門で寫眞を撮る。後ろの山は霞を釀して午睡してゐる樣だ。一時　醍醐をバスで發つ。

今度はバスの中に閉ぢ込められて、右のみしか見ねない。山近く、咲きすがれた梅林に續いて隨心院だ。此の邊一帶、竹藪と茶園だ、藪中の紅椿の一輪も心を牽く。コンクリート塀が長く續く。京都刑務所だと云ふ。碧服の數人、鍬で畑を耕してゐる。其の後に看守が佇つてゐる其の黒い服は、いかにもいかつい重壓感だ。山科御坊から山科村を離れて、蓮如上人の墓への小さな道標を見て、三條へ着く。京阪電車の七條に下車したのは二時だ。

博物館の崖の大石を珍しみながら數丁で豊國神社へ着く。神官の案内で門内に入り、吉田先生は一行を代表して玉串を捧げられた。

此の門に掛つてゐる豊國神社の題號は、後陽成天皇の御宸翰で、額緣は金箔を用ゐ、ぐり〳〵と八角形で、飾りが複雜の頂天になつて居り、此れ以上になると德川時代風の墮落になるさうだ。以前は額のへりに金箔を置かなかつた。此の唐破風は、形ちとして勝れてゐる桃山時代の物で、德川時代だと左右がなだらかでなく、上へ反れて居るさうだ。安土、桃山時代は、あら

ゆる所に金箔を用ゐたのも注意させられるのであつた。蛙股も金物を打ちつけられ、左右に延びて、上の重量を下の梁に持たすように出來てゐるが、德川時代だと技巧的に刳つたりして、實用的では無くなつた。柱は、柱の面の十分の一位の面を取つてある。此れも桃山時代の特色である。

寶物殿の前に、秀吉が小田原北條征伐の時、三條の橋を掛替へた柱石がある。秀吉は戰爭する度に進んで行く沿道の橋を掛替へて安全を計つたさうだ。通信、道路についても細心であつた秀吉の一端を知る事が出來る。

豊國神社は、秀吉の死後、豊公廟を建てたが德川時代となつては、義演と吉田の神主とが協力して、名も八幡稻荷として、德川の眼を忍んでは御祭を續けて來たさうだ。

境内から隣る方廣寺の大鐘を仰ぎ、大佛殿の前を素通りして、三時妙法院へ着く。玄關を上ると、籠は松村景文の筆、襖は狩野永德の畫いたものだ。此の寺には當時七人の公卿が住んでゐたさうだ。台所は三百疊敷だと案内者が自慢をやる。寶物館には珍しいものが多く。中にも印度副王より秀吉への文の更紗、小田原陣より大政所へ宛てた秀吉の手紙が眼を引いた。くす玉もあつた。此處の襖は皆、國寶である。

妙法院の煙出しを振仰いだ中村先生は、これは雄大だと賞めてゐられた。

智積院の門には拜觀中止と貼出してあつた。俄の來客かも知れぬ。三時半未だ高く輝いてゐる太陽を仰ぎながら惜しくも散會した。

參加者は中村直勝先生、吉田鋭雄先生外四十一名だつた。（三月二十七日）

豐太閤遺跡踏査

桑原直子

豐太閤事跡につき去歳一ヶ年の長きに渡り中村先生の講話をなし給はりし跡を尋ねて猶面のあたり先生の御敎へを受けんと

第一回は醍醐三寶院東山邊巡遊をなし、第二回は大德寺北野神社妙心寺に行かんと定められければおのれもその數に加はりぬ、よりて昭和七年四月廿四日朝大阪驛にあつまり、汽車にて京都驛につき、其所より車走らせてまづ紫野大德寺へとおもむきぬ。此あたりはすみれ咲、麥生色こき野とかねて聞けるに、今は電車も通ひ軒うちつらなる町となれり。

本堂は修繕中とて拜觀をゆるし給はねば、總見院なる織田信長公の墓にまうづ、是なん主君の菩提とむらはん爲豐公の建立し給ひしものにて眞のおくつきにはあらずといふ、眞の亡きがらを葬りしは、此方なりと本能寺と阿彌陀寺の今猶あらそひつゝありときけど阿彌陀寺の方ぞ眞なるらむ。

春雨のふるきおくつき尋ね來て
こけの雫に袖ぬらしけり

三玄院なる石田三成の墓にまうづ。主家をおもひ起されし戰は破れて加茂の川原の露と消ゆられしぞ痛ましき。

聚光院に利休はじめ千家代々の墓あり、流石に

世のちりをよそになしたるみやひ心はおくつきの形にも見ねてなつかし。

みやひをのふかき心は宇治山の
　木のめの露をくみてこそ知れ

世にひろく吹きつたはれりみやひをの
　こゝろすましゝ松風の音

大仙院に名高き石の庭あり、うち見るにさまでひろからねど、さま〳〵の形なせる石をする、樹をうゑそへて、たくみに、みやひにいはんかたなく心地よし、猶幾百年を經にければあらかねの土も見ねぬまで苔むせり。

心ありてけふの小雨やふりぬらむ
　こけのみとりのいやうつくしき

かきしるす筆も及はし山水の
　けしきを見する石のかす〳〵

足利の季末にかりこものみたれし世にもかゝる庭をつくりけむ事をおもひやられて

朝夕にめてそ見にけんふりしきる
　矢たまの音をよそに聞きつゝ

自然の景をとりいれし庭の生命は大凡二百年ばかりといふ

この庭は石のきにけるこけころも
　千代もかさねて見はやされなむ

ながめあかねど時移りぬとうながされて北野へといそぐ。

北野神社、まづ拜殿に案内せられて一同伏をがみ了りてそれより人のたくみのかぎりを盡しゝ殿内のさまかつは御前に供へある二の大鏡のいはれなど、事細かに聞くことにひるにもなりければ、社務所の大廣間にてお〳〵携へ來りし

わりこひらきぬ。

食後會計報告及役員改選の事などをはり後寶物殿へ案内せらる。此殿外は鐵と土との外國さまなれども、内は檜もてつくりなされければ、木の香たゞよへり。陳列されし品々は國の寶となりつるものも多く名高き藤原信實筆の北野縁起繪卷物ことに人目をひく、その外よそにては見がたき書の數かぎりなきにも文の道の神の御稜威ぞ仰がれ侍りぬ、加藤清正公の奉納し給ひし直徑三尺二寸の大鏡あり裏にそのころの日本地圖をきざみ付けてあり是三の大鏡の一なり

二は松浦武四郎君が明治七年に奉納せられし大さ前に同じにて裏は日本の北邊の地圖なり、それにそへられたる和歌は

幾歳かおもひふかめし北の海
みちひくまてになし得つるかな

とあり、君諱は弘、通稱武四郎、號を柳田柳湖雪津北海馬角齋憂北生といふ文政元年二月伊勢國一志郡須川村（今小野江村舊紀州領）郷士桂助氏の四男として生る、父君は本居宣長先生の門弟にして、傍ら茶事俳諧を好まれしとぞ、天保元年（十三歳）津藩の督學平松樂齋先生の門に入、同四年正月同家を辭し諸國遍歴をおもひ立至る所名士をとひ、大塩先生の門もたゝかれしと、生來名山大川の跋渉をこのみ、富士筑波より西は阿蘇雲仙、東北は月山羽黒その他の高峰峻嶺に足跡を印されしと、其間懷にせられし鐵筆こそ命の糧となりけれ、天保十四年（二十六歳）長崎町役人津川翁より、魯國が吾北地占領の野心あることを聞かされ、憂國の念おさへがたく身を以て北地探

檢の意を決し、九州をさり故郷にかへられけるが、父母逝きておはさず、涙ながらに菩提を弔ひてしばし足をとゞめられしが、彌宿志を果さんとて、

弘化元年廿七歳故郷を辭し、國々を見めぐり、山川を跋渉し、やう〳〵にして陸奥の國鰺ガ澤湊につかれしが、時嚴冬冱寒且事情ありて渡りかね空しく引かへされ、

翌二年(廿八歳)東西蝦夷の地にふみいり探檢せらる。三年再蝦夷樺太を探檢して越年せられ、嘉永元年(卅二歳)又蝦夷に渡られぬ、是三度なりき。安政二年(卅八歳)向山源太夫氏の函舘奉行支配組頭とならるゝや、その推擧により蝦夷地御用御雇仰付られて、ともに樺太まで渡らる、浪人の身として三度探檢の困難いはん方なく且松前家が幕府より預りながら、防備に力を盡さず土人を愛撫せざるなど世にあらはるゝや、君大に惡まれ給ひしが、彌々幕府の役人となられては、松前家もいかにともしがたければ、おもひのまゝに働かるゝ時は來りぬ。君江戸にある日は日記や地圖を刋行し、建白書を以て當路者の目を覺さんとし、或は道中双六を以て女童にも北地を知らしむべく、千々に心をくだかれぬ、

探檢中の困苦おしはからるゝ歌數首

あや、ふくも立日潟に舟うけて
突岨(トツソ)の岬風を待かな
夕きりの胡砂吹く風に澄つらむ
ふせ籠の熊の聲たつるにも
歸り來る鷲やねくらに迷ふらむ
磯の岩ほにわれ假寢せり

白鷺の立を知るへに今日幾瀬
　心ゆたかにかち渡りせり
夢にたに知らぬ山路の草枕
　馴れ來し犬に夜を守らせて
今日もまた木の下かけに假寢せん
　岩根の上に袖枕して
一棹をさしてもかなと言わかぬ
　異國人の守るにまかせて
水棹とる蝦夷のふり髪青柳の
　いと吹きませて靡く朝風

明治の御代に定まりける日露國境北緯五十度といふことは、君が尤も主張せられし處なり、其功績を思ふにつけて、長々しくかきつらねし罪ゆるさせ給へかし、立かへりて第三の鏡は大阪毎日新聞社長本山彦一君の奉納にて、大さ前に同じ、裏の地圖は滿洲、朝鮮、臺灣、南洋を加へ、明治大正の御代の御稜威のかゞやきをいはひまつられて

大湖のつゝく限りは日の本の
　光を仰ぐ御代となりにき

とあり

北南國の數そふ大御稜威
　かゝやきし代をうつす御かゝみ
神かきにかけてそいのる御かゝみの
　なほ數そはむ御代の光に

本殿は秀頼公の造營せられし八棟造りとて、豪華なる桃山式なり。

三光門は後西院天皇の御宸筆にて、天滿宮と遊はしける額揚げあり、ほりものゝうちに日月星あるを以てこの名ありとなり。昭憲大后大内に

のぼり給ふ、御いとまごひにまうで給ひし時、納め給ひし紅梅なりとて此門の外東側にあり

紙屋川にそひし小高き地は、豊公洛中洛外をわかつ爲に、長さ七里の土手を作られし一部の今に殘りけるを、お土居といひてしるしの札建てり。

名高き茶の湯の事どもかたりかはして花園の妙心寺に向ふ、いつしか雨はやみて空はれ渡りぬ

玉鳳院に鶴松君の廟所を拜して

かれし跡とふも露けし天か下

おほふ大木とならむ小松の

春光院に堀尾金助君の木像ををがむ、法名逸巖世俊禪定門

天正十八年六月十二日相州小田原陣中にて身まかられしを、母君いたくかなしみて、其三十三回忌供養の爲かけられし

熱田裁斷橋　擬寶珠の銘に

てんしやう十八ねん二月十八日にをたはらへの御ぢんほりをきん助と申す十八になりたる子をたゝせてより又ふためとも見ざるかなしさのあまりにいまこのはしをかける成はゝの身にはらくるいともなりそくしんじやうぶつし給へ

いつかんせいしゆんと後のよの又のちまて此かきつけを見る人は念佛申給へや卅三年のくやうなり

とあるにいまも猶人のたもとをぬらしけり

亡き子にかけしはゝそ葉の露いまは念佛申て渡る人なしと聞て

ゆゑよしを人こそ知らぬ橋はしら

くちせて殘る水くきの跡

南蠻寺の鐘山樂の繪襖などけふの豫定は見終りぬ、終日先生のねもころの敎へを一同謝し參らせておの〳〵こゝろさす方へと袂をわかつ。おのれら七八人うちつれ立ちて佐久間象山の墓にまうで、それより御室の花を賞せんとてゆくしばし茶店にいこふ、花のあたりはふみわけがたきまで浮れ男ざれ女の來あつまりて賑はしさいはん方なし。

ふるき跡とひてぬらしゝ我袖を
花のいろ香にそむる嬉しさ

思ひきやむかししのひてかへり路に
けふまさかりの花を見んとは

暮ぬうちにといそぎ渡月橋を渡りて、散り殘る嵐山の花をながめつゝ新京阪電車にのりて暮はてしころ我家にかへりぬ。

懷德堂記事

△記念祭典　昭和六年十月三日記念祭典を執行し、終つて文學博士服部宇之吉先生の「誠について」と題する記念講演あり。

△理事改選　小倉、今井、上野、木間瀨各理事は十月九日を以て任期滿了に付、同日大阪ホテルに評議員會を開き改選の結果、右四理事を再選、評議員江崎政忠氏を新選す。

△財津敎授　豫て腎臟病の爲療養中なりし財津敎授は、十月三日市民病院に入院後尿毒症を併發し竟に四日午前十時二十二分同院に於て逝去せらる。

△故財津敎授告別式　十月七日故財津敎授告別式を本堂大講堂に於て執行す。